和歌布利和計賀美完

特別
イ 4
3163
84

貴
14
3163
84

宮内省
圖書寮

とかやの雪まろび野ハうすくわらひとり言く
あらりてれとうあるこの塚のもときはむ
こそて日こそにむまきそいはそふらなひこもの中に
ものこそ思へしくおゆるうちやあむかと
ぜ山のぜ多流こそあかやしらとそとり紀と
ものうちするついてこそふなまくのたらしく孝
ちこあまくある前こそいとゆうしにれまるまを
なひてんやとふわさまのやうしにれハあいとらう

たくさんの人ハうハうふうよゐんとなのちと！
よみてよいろはハなゝ一ちやとい（いさゐんとゝふ
ゆゝくかけとてすゝアとうゆゝてゆいてれ
そらゝひてゝこゝふもかゝすゝうくとゝれいをえろ
ハしゆくゝまゝハうゝしゝかゝぬハいてゝ紀てゝうら
せんれかえとてハやりをてゝよとてゝいてくゝいう
色をゆゝ探ゆゝいゝくゝゝつゝう紀
はゝゝ紀てゝあやゝき

うゝハ人の数あゝゆゆゝ
ふこゝとゆゝれハ声ゝいつゝもを
うゝあとい一ゝ第まゝ紀ふのゆゝるゝこゝとゝうゝれとを
こゝてゝふゝの第ゆゝれまゝ
ゆゆゝるゝこゝろとゝれハとゝれ紫ゝふゝそのとゆゝれ
受ゆゝるゝこゝにいひゝそゆゝくゝとゝとゝれみゝちゝもいゝ景
このゆゆゝやゝまゝのゝこゝよゝとゝうみたまゝゝるゆゆゝるゝの元の
みゝとゝをゝうけゝつゝきゝそゝだゝにみゝちゝくゝるゝあゝいゝれ
ゆゆゝゆゝまゝ三ゝろゝしゝゆゝとゝ出ゝへゝら紀ハゝその神ゆゝゝ神の

ます鳥とてがきまくもの、こゝれハうかゝのとゝ
うの鳥へなどこゝろ〳〵こゝハうゐいま鶯らんぶ恵に
うまれて神代ゝ万葉ゝ伊勢物語ゝの
うゐまん出るやうゝとゝふゝりゝ人の声を聞と
いつて一句ゝていゝたゝそゝうもゝ三句三句のも
ありて文字の数もゝ五ゝ七ゝ五ゝ七ゝ五ゝのこと
ばさをのゝこゝとゝ五句五十字の句をゝ詠かねゝ
つゝよゝしゝわゝすゝいけゝる句れきをゝ人のゝ心ゝ詠ゝ

此ゝうゝこのゝよゝみゝ句ゝ（句とゝゝれハ意深玄妙ゝ句
乃ゝ示なゝゝ心ゝ中ゝ〳〵ゝしゝゝれハ人ゝゝれゝら
やゝゝてゝその源ゝよゝみゝ句ゝゝゝいゝるゝゝとゝゝゝゝいゝハ
此一字の源ゝになゝまゝるゝゝゝゝゝれ句
一言をゝ五句ゝのゝゝていゝゝゝゝゝ

雪きえのとうになれば
うぐひすにものゝをとをまねそうむ

かくれぬ恋は法ゝ詞に法ゝ所に所

のとうふるとはゆい所といふ法あるなり

山里のとに埴をとはゝ

なるわるものゝをゆ所をゆ詞に法あるなり

ふかりと所をゆ法なり。雪をえてはとに法

ゝといとゆ埴はよきあるをとはきもふんふけも

せいをへき詞なり。は雪ふりの詞物のうゝ詞あきらか

なれはあらふへき詞もまれしあまりなく世ゝ

みゝゝてかまもゝまもゝるをもあるて正一字三つ

とうとふふり。あゝんをとらうにやはりて

当ゆへきをとりてゝよりは文一句をとはなき

ものなりゝれらゆは文一句をあるはゝ和のうち

正一字をとりをえいひとりはゝのとを文

いちゝとゆりふんをすくゆゝてゆのとふへき

一ぬちとのこたてそのかのわさに浮ゆるやうこうろ
うれハ浮ゆ見へてもとゆハきことを一ぬちイ
たてゝふゆゝ此又細いのうらよいひるれ初ハ変も
暑し冬も寒しといへしけもの字を河とかたこ
或を第をいふとて未とをかり冬をふふとて人のう
とを原やうのをハりふきをいてゝ冬をり冬を
二三度四度冬暑し見よ冬の河のをわりうれを
ハ冬ハ冬ハ冬

はてはくやしいまうてつるものくろいぶへまゆふへき
さういとわさとりさうへてだく秋らふのぶらちわるせと
たくわるを貴一のやまいまるぶらるるいすまを一つの
ほうひさまも八とをへをとをとすきとふ
らうとをやに四かるねハあるくうひかるもの
安へぬ河のこまり面れふ学ものるもの乃
悟をりしまひてたう作り花をるるまく学を
ちうをとうこと霧ハ秋うを若も与るぬ美也もちけし
胡蝶飛来るハ天地同根のなるれハ我れ秋とも
をとをとうこと言へ人まさうまとをとをるんも
いりこみのりと院よにうるくハ下流いてうすま
ぶをへてうえ北人のくよまちくとするハと
こんるきをれりをれちりとれのういるへきれる
ちりてんを平易りて院たりき河をりて一ぶち
ようれハ自ずを生て別このふをれ
むうれ人ハうくのをひくまをとて世界

名をつき上るとかれり人を亦人名すり下りての
よつゝゆきこゝ居ゆとゝもたれは多くへりやうう
てこゝ死みちぶりて平生日前のとこわなり。
清のものとたよく心をつりてこゝろへし
清こゝさくこゝとちこゝは数百の文字をつくるもの
文字とたのもりりそれは字数字平仄をわち。
詩文の法則をなりとゝかけすくもこゝ記わう
仲のこゝはなるわつくりきをつくふりける。
なかへ会の学ゝしあまり七すをそすてわやこ
くゝきんをり（ゆくゝふたこは神の作へしやまと
こゝこれは自へこのうへ分一字よりはしを
とゆつめてんとふこゝ多へいしとをあらせて
也とは。つをきをゆこゝをこゝ月とをこゝ。
かゝ一字よりはきこのふゝも此河の中に入て八一字の
ゆもきこゝ千りの石のこゝいゝとをれは一字
こゝ一字のゝ作ゝまり一字こゝて一字のゝ変れは

字ノ又入無うるぬ一字と入られハ二字よりて一字
変ハにさ三人さ三ハ所にあるハ所にあるハその変ゆへきハさま
ハ所にあるハ所にあるハ所にある

やまのうちにかゝりたる雲

凡雅

山のうちに家のしるきたる雲ハ

と詠まれたるなり

先ハ共に雲の白の所く所のかハ目にて其ゝ違

されハ歌ハとてもきらふハ文にあらぬ故 古今撰者

まてにかくれたる。ハ下用ふられ作者をのをたた

やうにうたふ月をうるうるる

古今

櫻をれ雪くゝられるうたもも

ひとのこゝろのあらんやハせぬ

さるる後拾遺

宮部の雲ハ白くゝ也ふ白しも白のうたもの

の櫻花の雲ゝよハゝす。ハ所ハ櫻をよしていゝ

雪くゝ人よむ。ひて雪くゝに数ゝる間ハ白くする

とハいふへからぬ。せぬこそうなして作れ云ゝ白ハ櫻花

なれゝ下ニよりて上のハんの消ゝる詠なり

きゝれ花のかりに入しくゝハさり

なる人のきる身りけるはかゝるみ

おなじかたてれ物とふ
とぶれるくまもちけり
よつの物とはとうくまもえても
まとまりをすべてぬをまつとふ月
ぬ所をハくとまりてるとをいり油のさてまるぬと
かくのとき　下ニさはまつもちむの類引言てしる

続拾
墨ゆ手物ゆ夕ゆくてる所
わまをて剛て立をもちく

新古
ぶとをいてもちこまてとり春を
ニやこのことを物ゆいけるれ

第三句目白ものれも。一ニハ春春。一ニハ冬まり
ものハ上下の句の三てありて物ゆる物

古今
さはまち匂ものきにちてふ花
いまもなちるくこてこのみるいろ

日
ハはまち物ものちむのうをかけ
むちのくれ油のうをそちる

出和五百日ありしも和のさほすい宵之文日を
はしめる部分いまもなほるくと新しく宵日うるて
おくらはや後のさほまつハ文日ざほをはしめる
構されいこそ書とかくとい(いや)二百ともかく
ありて上めは捨もちりあり

古今 きのふこそさなくしらいはのまに
いかゝとはてよりて秋れのふく

拾遺 きのふこそ年ハ元うの春ゝすと
かはてうれ山よもやちこたり

この古今歌八月日見れとくるに終てされふの
やうにふるりて実のさのあたりに拾遺の歌ハ
実の明日をいふ。伺者とい今日宵にあるを

古今 世中よたつてしらくれなるうをハ
さるれこそろハれをけうらはし

毛八元四さくをもち敬をとこ豊よ八雨風もを
いとへや野ちくなのまんれいと四方元ハをとより

世のふるゝ柳とていとものすゝ[illegible]の人[illegible]のとうゝんとゝ

続後撰

ぬゝきうれふとてさらてれのとうゝる

春のいろよあゝハさつゝとゝ

見ハ春ふかいあるもれよ

八番

一年に二度よりかゝ見のれ

もるれいろにあゝぬゝ見

見ハ柳ゝ春よりふかいゝ春のゝと云河ハ一ゝて

ふかゝ三ゝよわゝるもゝゝう

後撰

世界に高山よりおゝくゝも

ふたのゝろやいとてゆもゝ

見ハ谷にふかあるものゝにゝう

新勅

若くゝく御川ゝ高ゝて

たゝのゝろやよさむゝゝ

見ハゝゝもむ人のゝふかをゝう

七月の晦日の日大ぬそよゝる

十六夕

夕はゝよをゝの山に消ゝの

こゝろのうちも秋にぞなる

家集

ふれぬとて恋ふるなり夢の

声ばかりまぢかくぞ聞ける

このへぬるくいかなるのうかのふるさと

うつたえて春はぬるくもや

見ぬ世の夢ぞ今はまとゝぎす声のうちとぞなるぬる

声のうちとこそ

古今

たのもつあもてそふるものとに

こゝろぬいろをくはしらぬ

後撰

いとゝのうちはなるゝはなるゝに

このうちをれたえてそふる

落遠

たのもつこぬよあまきにぬまは

きゝとわるふそまいは憎れる

此さのあとゝふとりて万葉集にいてゝかれこは

今憑とうたとく人の家よこのまむる何にて

いかゝ〳〵ちかくよりてゝ有あけとかゝふ人

宮もさぬこゝろを又可し 拾遺

ゆきたにはなれるきしをもつてかしこ
このちハくをとうこゝにはるゝか
花ハくはるのまゝにもゆるふゝうすゝきのもと
いゝりかゝ泊ハ所よりて消はれハ白のわさてこそ
ときすのこ
後撰 東ゝまりゝるゝをぬるかゝ意ゝ
ゝ
ゝ

所為にもて寄るれいこそ。爲のうといふ。
歌を取りたとへ。中うると見ることくるわる花。
一字よりて心を潤をるといふつまのこと
かうのこゝろをいてつくりきもてゆうし。ふきとる
日をうきぬとも。はくすべる。こいふ物詞を
上下にうて潤をるとわをうをもわくれこと。
はすへて詞をいつるうふをてふをいとい。り
潤てふを又伝所もしこの名さへ

きこゝろ。ふるとは。いつの比をいいもわるとも
ふををふくふるものゝ八掘鳴暁兼
うとは名八字へるもれいいひしわるとも
いとのちのをうとはれくまれ詞をふ
をををてよとゝれいさいひとくあり
かゝくをいいとうをわをもて文とあれる
下につく詞をををを者をる者
ふいてよいあきゝ文をる文原一文俗キ

ゑとこゝろ〳〵ゝ下のうかハ所〳〵にてゑとと
ゐ通り。ゑハとゝいふ。ゑハの字てゑハ。ゑ行
ゑと。ゑを。ゑう。ゑよ。ゑか。ゑの。ゑや。
ゑも。ゑ下のうかゝられてゑしり。又ゑし
ゑも。ゑを。助字とゝ。大し心ゑれと
ゝりて。ゑゝ。助字ふゝを具する
てもゝり。又ゑとう。ゑとそ。ゑとあれと。
ゑう。ゑう。助。ゑ〳〵二字をもゝうぬまし

ゑとこゝそ。ゑとともや。ゑと三字をもゝうぬ
四字をも五字をもゝうるあり

色ハ。此下三〳〵へき詞てゝらりゐれのうか
をもゝうきて四十二字いゝもの頭こゝりて。
つゝねゝ。ゝ。ゑ。弱わゝ。し。内。未。ゝ。
下をわり。四百餘言とゝりゝき。違ゝのゝ〳〵
ゝハ。程。五。数の。詞いそ〳〵。わゝり。ゝ。
重れゝゝの。詞ハゝ。ゝ。ゝ。

又ハいろ〳〵。又ハいつたり。又ハ物の数たり
又ハすこし。又ハ少き。又ハすくなの
あらひまていたる詞いとれぬ詞あり。ゆゑと
いひきと云のとゝ下のうかよりてき濁変
きハまり。下ゝ高光よりそこ〳〵ゝ高へし
又ハや。又ハも。このてよハ大こと所の下よあり。
是もかゝりてゝ高へ。ゆハの者ハ和の
言葉よりこゝ

色よゆ下にいる詞ハゆの下とハゆ下にいる詞ハ
へし。又よいるゝ。又よいてゝし。
の数より。又よすくなる。又よすきゆくいたれ
いと也。詞上よ回し。下のてよハ下て濁ることを
又回し。てゝハ、二字又ハ。又よう。又よそ。又分。又
ゝ和。又そ。又も。三字又こそ。又ゝもそ。
動ハ。又よと。又よす。又。又ゝ。もの数

色ゆ下にいる詞ハの下のようなるもあり。回し

きゝなりゑをゑゑゑ

いとまなく菊うゑたれぬのこゝろなるべしもし
ふるきハ天下の人語ひ伝れハ之を考ふ
きうこねといとを詞いとをぬ詞うゝ
ゝ
ゝる而ふれ形ふり色まとふすれ下にて
いとる又ハ初いてちきりてわすれておと
ハゝるかしかの下ハいとる粉てふとゝ
とかさゝてゝを結へたゝてよとゝ
とまないて何よまんとハ初ハ西へゝ
奇吸ゆまこゝてよとしハ初のつゝかゆ人るもの
こゝまわゝんをけゝふの詞をゝふ色ゝ
むゝてよまとの名さへふ見世の人乃
ゝよわるをこゝふへ古奇よてよを名
四字入る奇わまゝ初ゝ二三ゝ書ゝ
けとゝれわゝゝをこゝてその言を三ゝへ
わゝの浦よゝ志ハゝゝれハゝゝをゝこ
初魚ゝ乃てゝ名つきわゝ

そるこすりこたるとゝんをてゝもかゝハ
ゝかわ太ゝかとにそこゝかゝゝハる
月ゝもも寒ひとゝよゝゝゝゝ夜ハ
いつまとゝゝゝをゝゝゝとゝ呂ふ
左右黒白点ともふてゝをいゝれとも右
点のゝハ河を自立よりゝを左点ゝゝも
まゝゝゝを点ハ点字をもてゝをハとハ
各自ゝゝゝ

かゝ文字をあつわゝゝゝゝ

ら[現五]ふらくとも風もいまだふちらぬほ
[未来く]
月をみるハ物もいわこせよ[下ぞく]君[他ぞ]ゆく
[ウハサ]
ひとも[他ぞ]こゝもとをハへしこそ
[自ぞ]
[未来ぞ]
自他をとうねとハこの君ゆく鄙ハ他ぞ鄙ハ他とふ
てをハふられと君ゆくとある風の他ぞ鄙他なる風
の[自]とかまち光又[未]ハ自とふをハふられと
鄙他なる風の[自]とうまりう一言とふ万言の通し
てこのんをはへし自の詞他の言といて別なるに
わゝに滑て言をとるをとうとも言へし一そうて
もわはゆへし

きのふらわ[現五]なもらふハ物いそいん[未]
こさゝめとれふハ独にいてゝつわ[下ぞ]
このきのふらをけさうるといてもふゝ[ウハサ]ゝを云ハ
志久なるもかうるへうにふるとを云とをるハ大ゝ
のとこちらわもゝ[ぞ]とハ現生ゝけさとふハ現生
ゝ[ぞ]まとみつるとを云よるこ物かゝまわ花のふら

わらべ　はくさ自他朝より言たてり　幼より
老まで　ものをてうみよいひて用とする詞
は　所をこそ　ものをわりなるものをわるもの
をを　ふいいくせ　ものはの詞　そもと
より　ものるを　ものるらん　くつねの詞　ここて　長短
所　ハ　此一字のうきりあまり　詞　そこそ　ちち　先の
を　ものはたらひる　この　言をかくついてゐねを
物　えあのうふつうしをもえらはしうふはい

さうてもつうきこと　ものもあらしこと　ハ面　嘉ゆ
ものを　ものるとう　化風　をを　物　をとうき
機　をかくてとかく　ハ　和名手加豆良今ハ俗ニシタカイテ書雞冠木ヲカシテノキトヨメリ
後　ハ　ふこと　ものを　ものもを　ものもの　ものるを
ものかくてとうえてあとかくハとハりなきことを　高
下　にあるもすハ　化さ　面　こまとひつハきを　ものひわ
ものてかきこれとりきり　ものるとをれかれる
ことは　ものを　ものるを　ものとうれよの

声をうつせるゝ神仏（ほとけ）ものの所行（しわざ）なれば
たゞいことわりよあるひとをかく迷ふよわるさ

祝
いとい　いといふ　いとらん　いとらは　いとらへ
こと云　現在　未来　ウハサ　下ハ

斯
いくえ　いとえいとや　いとえん　いくえは　いくえ

厭
いとい　いといふ　いとん　いとは　いとへ

去
いね　いかも　いぬる　いかん　いつる　いてん　いてよ

寢
いね　いぬる　いねん　いねは　いねよ

入
いり　いる　いらん　いらは　いれ

出
いて　いつる　いてん　いてよ

急
いそき　いそく　いそん　いそけ

祈
いの　いの　いのる　いらん　いのれ

座
います　いまさん　いまさは

言
いふ　いう　いん　いへ

晴
はれ　はれる　はれん　はれよ　日月　雲霧　心同

匂
よかい　よかいふ　よかいん　よかは　よかへ　色　香

解
とく　とける　とけん　とけは　とけよ　雨雪　氷結　心同

問
とい　とふ　とん　とへ　飛ハ　濁音　其同

調
ととの　ととの　ととの　ととの　ととへよ

敵
ちり　ちる　ちらん　ちらは　ちれ

契
ちぎり　ちぎる　ちぎん　ちぎらは　ちぎれ

沾
ぬま　ぬる　ぬれん　ぬれは　ぬれよ　ぬれ　ぬれる　ぬれん　ぬれは　ぬれよ

折
をり　をる　をらん　をらは　をれ　暗

急
をこり　をこる　をこらん　をこらは　をこれ

奢 おごり

別 わかれ

渡 わたし

他 ほかし

変 かはし 代同

顧 かへりみし

薫 かをりし

帰 かへり

苅 かり

枯 かれ 雜同

詣 まうし

隱 かくし

鞠 まりし

霞 かすみし

寄 よせし

琶 びわし

立 たち 雲霧霞煙 接同

尋 たづねし

頼 たのみし

絶 たえし

滝 たき

仕 つかへし

作 つくし

願 ねがひし

流 ながれし
靡 なびきし
生 うまれ
老 おいし
則 のれし
報 むくいし
植 うえし
生 おいし
おいい おふ
おいびと
おいおい
おひよ おいね
鳴 なかし
掬 むすび 水 水糸 細き流れ 玉藻
移 うつし
織 おりし

落 おちし
後 おくれし
朽 くちし
宿 やどり
追 おひし
贈 おくりし
遣 つかひ
置 おきし
焼 やけし
曇 くもりし
暮 くれし
悔 くいし
紛 まぎれし

遥 まさり

煙 けぶり

吹 ふき

嶽 あらし

待 まち

降 ふる

更 ふけ

流 ながれ

増 まさり

古 ふる

氷 こおり

阿蘇 日本紀 あえし 吸集ニアエトヨメリ

逢 あひ

轉 まろび

騒 さわき

榮 さかえ

風 かぜ

酒 ささ

消 きえ

乱 みだれ

知 しる

雨 ふる

時雨 しぐれ

敷 しき

拾　ひろひ　燎　もえし　塞　せきし

河のゐくさよりつゐくことかくのごとしいろはの歌

ちりて花よりちりゆくものはかりてなにかは

のこれる河も花よりかなくさかくらくこそ

山川茅木鄙田奥蓋材の外ことらく河ハ彫

いつくきるわらくものこそ一ときをくく奇と思ふ

色き根ふりかくいとも乃かんはるられハ見と

きくこと聞くものと信とをつけて一言をふくく

のふるかをとうとうとしく

見　こと　見玄　こゝハ　ウハサ

こと　既生　こよ　下知

未来

こと

色ハ大元をこうるて河のこと色玄あるこゝ

こゝ色こゝ色こゝ色こゝ色こゝ色こゝ色こゝ色こゝ色こゝ色こゝ色

もこゝあり奇よるこゝ色こゝ色こゝ色こゝ色と自ともこゝ

他ともあるこ

二月を生　みし多ちも　二月を原　このやとるはは原さくくハ

よりハはされり　はいそをくる——

ゐもにらしよの
月を恋しき

むらしやわうちくとと
うちうちとしー

こうの
花も白しこうりくこれこねこえこもこえすこね
わらしこを花又奇よりて淵明自他よりわうも
上のごとし

若木の桜乃
はなりをそこる

うらしまいつと行
わうやとこの

みるくふしよ
かしくふくはしー

もちくちちうこゆく
月うみのー

こうへ

こうへしみへまーこてまーこてあと郎未来
うれとよりてこのことにあこうこうこうこう
こうこうこうこうこうこうこうこうこうこう
まりて神をにかの四五の月に未来の句ハ淵
りしー下もさんうへー

二句と生
おすもこうはうり
まーき桜乃

二句と原
ちれうれうせに
ちうへくまかー

二句を生
よのまの雪乃
ちう花をそこ

三句と原
秋花いてく有明の月乃
三月ちうー

ここハ 花もこうハこうこうこうこうこうこうハ淵明と之花ハ自他
過用の句ちうこ未来なり下こうこうこうこうこうこうへー

二句を生
をりふしの
うれをこそ

二句を生
ものこそかなしう
あられをはらへし

こよ　光もこよりこそ
みとわまもうるへし

ほ
いてこよ
ちりうるねの
声をはりう

三句を除
ふる雪の
ゆるるを思いて

二句を除
こぬ人をまつと
ふくるよの月

ほ
雪の
つもるを
けてわるると

二句を生
こよ
ちりはかの
おりるぬるを

夏をとふこころ
なくるも鶯のきて

この文はいはゆる一句を除いてすへいとをかしけ一言よりうこと二句をうこと三句をうこと四句をうこと五句をうこと六句をうこと七句をうこと八句をうこと九句をうこと十句をうこと十一言よりはるかにくだりてふるはあるすべしとこころ

とゝれば百人化もハ百ゝまでかゝらぬ已達
動能のゝるゝとハ何毎々奇異々やうしき奇うも
ゝうゝ〳〵先ハいやしきゝ翁のいの声ゝ聞ハかゝるゝ
はゝるゝ所とゝゝまるゝを〻ゝうゝも〻ゝるぬゝあゝるぬハ
いゝそけいゝく敷ゝゝゝうゝやゝ〻のゝいゝゝ能ゝ
ゝ里ゝ〻ゝゝゝゝいゝこぬハこの頃ゝわゝるゝのゝゝ
ゝにゝゝて難ゝゝえゝゝゝ（ハゝゝゝゝゝゝゝ
かゝる名もゝゝるぬわいをゝゝてゝゝかゝゝすゝ

こゝれも大みゝゝの奥のゝちゝゝゝふゝゝゝゝゝゝ
ゝて生ゝゝゝのゝゝハゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
難あゝかゝゝゝゝみにゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ能心ハ凡のゝゝ何ハ波ゝゝ
風ふゝぬゝゝゝのゝゝゝゝゝゝ何ハゝゝゝ
ものゝゝゝゝゝ下沢ゝゝ二句三句をゝゝ皆所に
ゝゝ〻ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ（
たゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

角　少上

きし　きうハ
きく　きけ
きうん

きし　きうはりしきいらん　きこゑるのこゝ
いろもあるへし　上下なから文字をへし

部云者きこしまり

きし　にふる陸風
　　皆自也

きく　きくく　きけハ　きこにきこえきこゑ
きうぬいろもあるへし　又清をへし

いりてきくいこと
終りのこゝ

ものあるを
まるをきく　曰

きうん　きうはきこうん　きこゑるきこし
いろもあるへし　又清すへし　上こうんの下ム
　　ふる曰し

あをもやきうん　うつるて　白を　自を
いりないのこゝ　きうん　他をもかへし

きうハ　きこなハきこいたらハあとこ自他通用なる一ち
　　字曰に白も人のうへ神うへもいもる　上ム曰し

きうふうの
波風のうた

麻のねきうは
芙もむもそ

きけ

きけ〻〻きてよきうふきうよいうもあるに
文粥をへしきけばといへもあに ふるれ文をも
波のうをこそきけといても

きけ波つもを乃
多のうた

ありそをするする 地之
波のうきうけ

思

ねもい
ねもふ
ねもう

ねもう
ねもう

ねもひ

ふいふ人ふいふ人ふいふ人ふいふ人ふいふ人ふいふ人

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ゆく

波ちこ花ゆく
ちか小舟　他

分ゆく末に
もそまかつる　自

ゆうん

分ゆうんゆの
まそそるらん

波れしうつか　こゑを
ゆうん塩たゝ　他

ゆうハ

ゆうゆうハかや
ちりのこるもも

あつたのうハぶまて
のこるもみ　自他
無用

ゆけ

みちことし
月まちてゆけ

第分てゆけ
ふるの中こち　ゆけハ　自

佳

見こし
見む
見ま

見ハ
見ま

澄も心うりて詞曰

見こし

佳　いかりハ自ト云
あれなりり他ト云

あ見ていかりハ他
こゝろ分と

見む

すむ人いる
世ゆうち

見む
人のとい花

自

見ま

あゝ人あちゝ自之
すゝ人とそ他之

ゆきてそすま
見ことはのちと

自

まさまハ　いろうにさまハ　すよハいろくも　自他通用
あらうへし　あやとそう

まわ　よの中ハ人ことの　たてまわ山も　よろき
ろ　山に成あ　ろ北よりあるます　てもきこそ
自之

この一言ハそうしるる自のことろきこえハつ日の徳
ろうてあるへし　ちてるゝ所ハ大やしろの
こんるふりうてちらこにろ梅ハきたあるぬ山と

をもふるへし　はこうまま　とう海ろ色の
光をもて用ゆるこのこよあるこ名を神さう名人
家をうらの人をろう　誠にあるハ言語乃
大道ともむしハ毛のすき無ハうもさこるてゆろ色
末の世とまりて何のう（のこのとと思ひて爾こた
ろハこ艶ハろう也　自己の好魚をこうて
培能先達の名をかう　大皇にいらからこを
う思て切ることろ　大乗せまりこ

難險の細路をこゆるからうまちハひこうてたほと
なりてとうくゝたれば前よりゝ梅ハきことの
わらんとをもてに枕のいしうるうたいかしよ
う毎図へし

いうくへふかう毎うくゝとハ
うれ人のをとをとんろ
みちかゝ一をち

西辰春洛東園南亭ニ
まどそなる　芦菴

ちいろうろうへるふとてかゝるものゝいをてう
久の木に毎ゝれそのこゝろと元長うなさく
梓ゆ　てうゝまれひのみ毎ものゝをくよとの
せくとをちにこハ図ゝよいうゝハきゝものもろ
なゝ祢ゝらもとてやうつ老菴のをさい

#1000

いろはにほへとちりぬるを

寛政八年丙辰三月

於能登九月己巳年

仲夏十八日写之　苔翁